



山岳文化と両義性

2013.04

田中文夫（神奈川県）

文化人類学者・山口昌男氏が今年3月10日にご逝去され、翌日の新聞報道で知らされた。「知の冒険者」と評され、代表的著書【文化と両義性】（1975年初版）で「中心と周縁」を論じられた。社会構造を日常的な「中心」と、非日常的な「周縁」に分け、文化の力は両者のダイナミズムな関係性から生じるとされた。

浅学ゆえ、山口氏の存在を知ったのは、先の新聞記事でした。早速インターネット販売から【文化と両義性】（2010年文庫第5刷）と【知の祝祭】（1980年第3刷）を取り寄せ、読み見込んでみました。

私たちの中心は「日常」な生活を営み、その周縁を「非日常」環境が取り巻く。非日常の様態として異人、異端、反秩序、タブー、混沌、彼方、等々をあげ、差別化や排除の原理によって日常と相対化する。日常の連続性の中に、非日常的な過渡的刺激を対峙させ、その相克のダイナミズムによって日常を浮かび上がらせる。

時の文化（風）は両者を取り込み、その相克の中から時代を生きる現実の総和を取りまとめる。中心の視点からは秩序を強めた現実を迫り、周縁の視点からは混沌に溺れるまでの自由を求め、中心に反発する。中心からの過度な秩序化はエントロピーを高め、周縁の自由に憧れる心を刺激する。周縁の自由さは、それ自身において現実の混沌に秩序をもたらすことはできない。この両者の相互関係の中から、「時の文化」として「時の様式」が生れ、その様式は絶えず変化する。

山岳文化は日常社会の中心ではなく、中心に対峙する「周縁の文化」として位置づくのではないのでしょうか。日常の中心で忘れ去られている「真に生きる意味」を求め、自然に分け入る行為の中で死の現実を見据える。この生と死のダイナミズムな関係は、日常に含みえない過渡性をもった「非日常体験」を提供する。中心となる「日常」と、周縁となる「非日常」との相関により、人間社会のエントロピー・バランスを調整することが可能となり、個の心においても当てはまる。

現代社会は、人の死を自然なものとして受け入れがたい文化です。高齢となり、家族に背負われて山中に置き去りにされる、「姥捨て山」のしきたりは勿論ない。多くの現代人は病気にかかり、何がしかの病名を付されて病院で死に至る。家庭における「死の看取り」は少数派となり、事故等による突如な死は、死にゆく準備も疎かとなる。人工呼吸、人工心肺、胃瘻等を含め、死を認めない現代文化は、無謀な山岳行為を規制（条例）し、反面では無謀な山岳行為者を救助（警察・消防）する。そして無謀な山岳行為者に「死の意識」は薄い。中心は時の文化の流れに乗り、無自覚な欲求を満す日常を、非日常的な山岳世界に持ち込む。

山岳行為を「日常から抜け出した非日常的な自然に分け入ること」とするなら、その行為に死を認め、では「死なないためにはどうするか」を行為者個々の責任で考え、対処することに尽きよう。そのことを隠蔽せず、日常と周縁のダイナミズムな両義性として周知させることが、山岳文化の存在意義を増すと思うのです。